

【第15回年次大会 研究発表 要旨】

ジェンダー越境の模索
 — 『おかあさま』における礼子の「男装」を中心に —

谷口秀子

わたなべまさこによる少女漫画作品である『おかあさま』は、少女漫画創生期の1961年から62年にかけて、少女向け漫画雑誌『りぼん』に掲載された。『おかあさま』は、生後まもなく生家の経済的な事情から裕福な家庭に引き取られて何不自由なく成長した少女が、その後の苦難を乗り越えて、生みの母との絆を取り戻す物語である。ヒロインである桃代は、美しく上品で気立てが良く、優しく思いやりのある「理想的な」女性像として描かれているばかりではなく、そのかわいらしいドレス姿や西洋風の潇洒な暮らしぶりなど、きわめてロマンティックな雰囲気にも包まれており、当時の少女読者があこがれと共感を抱くヒロイン像であったことは想像に難くない。

『おかあさま』には、重要な登場人物として、ヒロイン桃代の従姉である礼子が登場し、物語の展開にきわめて重要な役割を果たしている。礼子は、桃代とは対照的に描かれており、桃代が因習的なヒロイン像を踏襲した「女らしい」登場人物であるとするならば、礼子は主体的で行動的な登場人物であり、「イギリスで女王のスケッチがしたいと宮殿へしのびこんだような娘」（『おかあさま』p. 226）という記述に代表されるように、常識や因習やジェンダーにとらわれない特異な女性像となっている。

このような桃代と礼子の対照性は、ふたりの言葉遣いや服装に端的に表れている。礼子の最も大きな特徴は、「ぼく／ボク」という自称と男性風の言葉遣いであり、きわめて女性的な言葉遣いをする桃代とは対照的である。また、服装に関して言えば、装飾の多い裾の広がったミニスカートのドレス姿というきわめて女性的な桃代の服装に比べ、礼子は飾りの少ないシンプルな服やパンツといった活動的な服装で描かれることが多い。常識にとらわれない型破りな行動をする礼子は、ステレオタイプ的な女性像や「女らしさ」のイメージからは大きく逸脱しており、「ぼく／ボク」という言葉遣いや服装などが、彼女をジェンダーや因習から自由な存在にする仕掛けとなっているのである。

少女漫画において、手塚治虫の『リボンの騎士』（『少女クラブ』版1953—1956年、『なかよし』版1963—1966年）以来、女性登場人物の男装は、その女性登場人物に男性として振る舞わせることによって、ジェンダーを越境させ、ジェンダーの制約なしに自らの能力を発揮させる装置として用いられてきた。同様に、『リボンの騎士』と一部重なる時期に発表された『おかあさま』における礼子は、男装の女性登場人物とは異なり、性を偽ることはないものの、「ぼく／ボク」と自称し、男言葉に近い言葉を用いて、ステレオタイプ的な女性の枠を超えた発言や行動を行っており、その意味で因習やジェンダーを越えた存在である。そして、礼子は、このように、因習やジェンダーを越えるために、男性の記号を利用しているという点において、比喩的な意味での「男装」をしていると考えることができる。

本発表では、『おかあさま』における礼子に見られる「男装」によるジェンダー越境の特徴と意味を分析した。また、礼子の存在がヒロインやプロットの展開および作品に与える影響や効果についても考察し、加えて、『おかあさま』において提示されている女性観を明らかにした。

註

*本研究は、JSPS 科研費(23520309)の助成を受けたものです。

[参考文献]

わたなべまさこ (2000) 『おかあさま』 第1巻、集英社

(たにぐち ひでこ・九州大学大学院言語文化研究院教授)